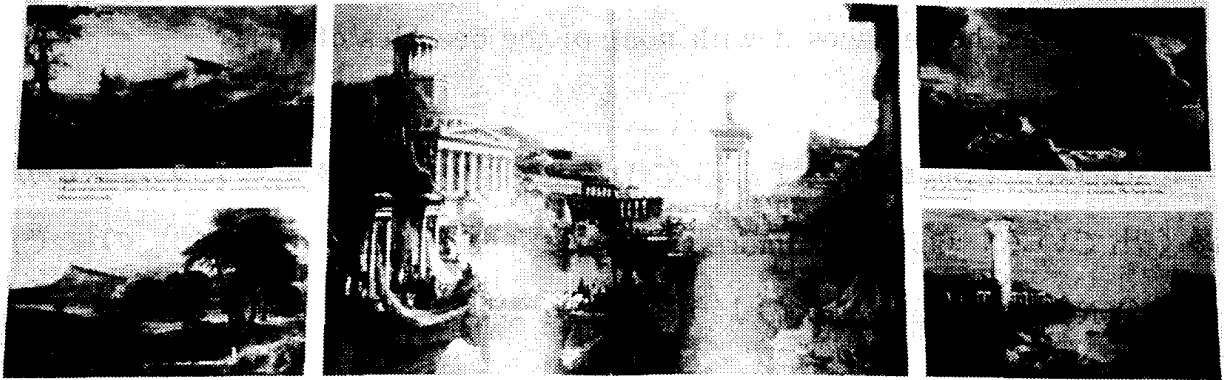


Thomas Cole の自然観— The Course of Empire を中心として

高橋 順子



I

Thomas Cole (1801-1848) が画家として絶頂期であった1830年代、40年代はアメリカ全土に開発事業がかなり急激に促進された時期であった。1837年の経済不況以前は特にたいへんな business boom を呼んだ。1816年から1840年の間に延べ3000マイルの運河が建設されたが、そのうち2000マイルは1830年代に建設されたものであり、鉄道の建設も延べ2000マイルに及んだ。この時期は都市部の人口も激増し、ニューヨーク市だけでも1820年には123,000人だったのが、1860年までには100万を超すところとなった。このような状況は決して Cole にとって快いものではなかった。彼は都会を嫌っていた。その不潔さや喧騒に加えて、都会は悪の巣のようだと考えていた。彼は、際限なく膨張してゆく都会をみて、ヨーロッパ社会の放縦と侵食の様子を重ね合わせて考えたのである。

Coleにとって都会とは、彼が愛してやまなかった自然をつぎつぎに消滅させ、破壊してゆく大産業の台頭を許す温床のように映っていたのである。産業こそ、自然の Paradise を都会の一部のように変容させてゆくものであった。Cole はスケッチブックに次のように書きとめている。

Nothing is more disagreeable to me than the sight of lands that are just clearing with their prostrate trees, black stumps burnt and deformed. All the native beauty of the forest taken away by the improving man. And alas, he replaces it with none of the beauties of Art.⁽¹⁾

この時期、Cole の知己である文学者たちも彼と意見を共にするものが多く出ている。James Fenimore Cooper は The Pathfinder (1840) の中で、主人公 Natty Bumppo に次のように言わせている。

Towns and settlements lead to sin. . . , but our lakes are bordered by the forests, and one is every day called upon to worship God in such a temple.⁽²⁾

William Cullen Bryant は 'The Ages' (1821) や 'Earth' (1834) の中で、アメリカの自然破壊について言及している。

O Earth dost thou too sorrow for the past
Like man thy offspring? Do I hear thee mourn
Thy Childhood's unreturning hours, thy springs
Gone with their genial airs and melodies,
The gentle generations of thy flowers,
And thy majestic groves of olden time,
Perished with all their dwellers?⁽³⁾

Washington Irving の 'The Sketch Book' (1819) にもまた変貌してゆくハドソン溪谷への懐旧の情がみられ、世の中が悪い方へ変わってゆくことへの批判を含んでいると考えうる。

Cole が当時彼のパトロンであった Luman Reed の依頼により1836年に 'The Course of Empire' を制作したのは、このような状況の下においてであった。この作品は文明の興亡をテーマにしたものであり、原始の様を描いた 'The Savage State'、文明社会の始まりの、平和な田園風景を描いた 'The Pastoral State'、文明の頂点に達し、人々が栄華の極を謳歌している 'The Consummation of Empire'、その栄華にも終末が来て、おそらく他の勢力の侵攻によってひとつの文明が完全に破壊されてゆく 'Destruction'、物質文明が人間ともども完全に消滅し、再び荒野と化した様を描いた 'Desolation' の五部からなっている。

Cole はこの作品の構想を1827年から抱いていたとされるが、1829年から32年にかけてのヨーロッパ旅行のひとつの成果として1836年に制作した。五部作の中心となる 'Consummation' は、縦130cm、横192cm のキャンバスでひときわ大きく、他の四作はおおよそ同じサイズで縦約100cm、横約161cmで、すべて油彩である。この作品はテーマと思想を風景画に取り入れたものとして一部の識者からおおいに称賛された。(しかし、一般的には、常にアメリカの雄大な自然を描くことを期待されていたために、不評であった。) たとえば J.F. Cooper は次のようにこの作品を絶賛している。

Not only do I consider The course of Empire the work of the highest genius this country has ever produced, but I esteem it one of the noblest works of art that has ever been wrought.⁽⁴⁾

Cole の伝記を書いた牧師 Louis L. Noble (1813-1882) は 'The Course of Empire' が Cole の画家としての著しい成長を示すものであることを認め、

次のように述べている。

It was here that he began to feel his strength for the grander issues of his art. He had now reached an elevation in the great ascent, one of the shoulders of the heaven-cleaving summit, from which he could survey both man and the visible world in vast, moral perspective.⁽⁵⁾

また The Literary World 誌は、キャンバスに描かれているもの以上の何かを感じさせるものがあるとして、次のように評価している。

What Cole saw with the eye of the painter he transferred to his canvas with the mind of poet; and whether he employed his pencil among the classic ruins of Italy or in the vast and solemn solitudes of the mountains and forests of our own lands, we felt that something more was on the canvas, and was reflected from it into our mind, than the mere transcript of a scene which had existed for ages in that guise, or which was daily looked upon by thousands.⁽⁶⁾

このように、それまで雄大な American landscape を描いて、名声を博してきた Cole が、旧世界を題材にとって壮大な歴史絵巻を繰り広げたこの五連作は、さまざまな人々に強烈な印象を与えることとなった。

II

1829年から32年にかけてのヨーロッパ訪問のあと、彼の心には過去のヨーロッパの盛衰にヒントを得て、何もない荒涼たる荒野から興り、終末に再び荒野に戻る文明の興亡を主題として作品の構想が着々とふくらんでいた。Cole はその構想を、人類の黎明期の光景、牧歌的田園の風景、快楽に浸る豪華絢爛の場面、そして破壊による終末の訪れ、そのあとに再び

現われる荒野の図という cycle を五つの連作とすることに決めた。

1832年 Cole は彼のパトロン Robert Gilmor, Jr. に、この連作の最初の scene がいかにあるべきかについて次のように書き送っている。

The first picture must be a savage wilderness—the sun rising from the ocean and the stormy clouds of night retiring tumultuously over the mountains—the figures must be Savage—clothed in skins and occupied in the Chase—there must be a flashing chiaroscuro and a spirit of motion pervading the scene, as though nature was just walking from chaos.⁽⁷⁾

実際に 'The Savage State' は、すべてがこれから発達、発展してゆく状態にある時期をとらえている。この絵の中では、木も岩山も、人も水も、雲も何もかもが始まったばかりで、それ故に活気に充ち溢れた様子が生き生きと描かれている。

これは人間社会の黎明期を描いたもので、季節と時も万物が芽吹く春の朝が取り上げられている。画面の中心部に聳えたつ山と、その麓に広がる海は五部すべてに描かれている。これによって、この連作の背景となる場所は同じで、そこに繰り広げられる人類の歴史、文明の興亡を物語っている。そしてまた、たとえ人類によってその光景が一時的に変えられようとも自然の姿は不変であるということを暗示している。

Cole はこの 'The Savage State' に類似した作品 'A Wild Scene' を、1831年から32年にかけて制作しているが、五部作の最初のものにするつもりであった。しかし、この五部作は Luman Reed のニューヨークの邸宅の壁面に飾られることになるので、その効果を考慮して、構図、色調、光の効果など全体のバランスが統一されたものにならないと見え、新たに 'The Savage State' を制作した。

第二部 'The Pastoral State' では、原始の状態からやがて文明が誕生し、

人間社会が形成され、徐々に村落は都市へと発展してゆくが、人々はなお緩やかなその発展の初期にあり、豊かな田園が至る所に広がり、牧歌的平安の生活が営まれている様子が描かれている。これは、この五部作の中で最も美しい理想の“state”である。Coleはこの同じテーマで‘View from Mount Holyoke, Northampton, Massachusetts after a Thunderstorm (The Oxbow)’ (1836), ‘View on the Catskill, Early Autumn’ (1837), ‘Dream of Arcadia’ (1838), ‘The Old Mill at Sunset’ (1844)などを制作している。

Coleはいくつかの異なった風景、構成、視点を使うことによって、同じテーマ、すなわち田園の平穏な生活から受ける恩恵、牧歌的至福を描出し、彼が自然の法則と考える、神の意志に従って生きることの重要性を強く訴えている。彼はこの時期すでにアメリカという国の政治的、経済的安定の上にたつ繁栄から起る社会悪、人々を墮落させる際限のない物質欲、欲望などに不安を抱きはじめていたのである。彼がこれらの美しく平安な牧歌的生活風景を繰り返し描き続けたことの裏には、楽天的な牧歌的生活を伝えるためではなく、神の教訓をもういちど考えなおして、精神的充足感を取り戻そうという強烈な願いがあったと言えよう。

同じようなテーマを扱い、Coleの代表作のひとつである‘The Oxbow’には、嵐が去りつつある田園の風景が、悠々と流れる大河、はるかに広がる耕作地、なだらかに続く美しい山々、未開のまま残された大自然の深みとともに描かれている。

この作品のあと Coleは、パトロン Luman Reedの共同経営者でもあった Janathan Sturgesの依頼を受けて‘View on the Catskill, Early Autumn’を制作している。これは Coleが昔から度々題材にし、また1836年以降、住まいと仕事場を置いたニューヨーク州キャツキルの村の近郊の風景である。こうした作品を出した背景には、Coleの開発による自然破壊への強い懸念があったと思われる。Coleはこの頃、キャツキルを通る鉄道建設に反対し、Catskill Creek周辺で起っている開発による変化についてかな

り激しい調子で、Reed に次のように書き送っている。

The copper-hearted barbarians are cutting all the trees down in the beautiful valley on which I have looked so often with a loving eye— this throws quite a gloom very my spring anticipations--tell this to Durand, not that I wish to give him pain, but that I want him to join with me in maledictions on all dollar-godded utilitarians.⁽⁸⁾

1938年に制作された‘Dream of Arcadia’にもまた同じテーマがみられる。荒々しい山の姿と開かれた丘陵地帯との調和が自然の雄大さとその美しさを表現している。人々は互いに平和な暮らしを営み、自然とうまく調和している。彼らには、都市化され、極端に洗練されすぎた生活の重荷もなく、信仰と文明の恩恵を謳歌している。木々はまだ切り倒されることはなく、都市はまだ誕生していない。土地はまだ開墾されていなくても、豊かな収穫は約束されている。まさに古代の夢の世である。田園生活の至福の様を描いた1844年の作品‘The Old Mill at Sunset’は、快い一日の終わりを静かに慈しむ人々の生活風景を描いており、まさに‘The Pastoral State’のニューヨーク州版と言えよう。

第三部‘Consummation of Empire’は、この連作の中央に位置し、寸法も他の四作よりはるかに大きい。細部の精密描写、考古学的正確さの手法で、整然と建ち並ぶ広大な宮殿、無数の人々が織り成す動きが、その富、権力、知識、様式に示される文明全盛の絶頂期として描出されている。ここでは、原始生活や牧歌的生活は完全に失われており、巨大な彫像が自然を支配してしまおうとする人間の力を顕示している。時代背景としては古代ローマ帝国のあたりをとっているが、これはまたアメリカの将来に関するColeの考えを反映していると思われる。1835年の日記に彼は、大きく膨張した社会に崩壊の危険が迫ることを恐れ、次のように記述している。

It is with sorrow that I anticipated the downfall of pure republican government—its destruction will be a death blow to Freedom. . . The hope of the wise and the good will have perished--and scenes of tyranny and wrong, blood and oppression such as have been acted since the world was created—will be again performed as long as man exists.⁽⁹⁾

頂点に達した文明には、確実に下降または崩壊の時が待ち構えている。第四部 'Destruction' では、絶頂期にあった人々が、注意、警戒を怠っていたために、知らぬ間に興っていた新しい勢力の侵略を受け、滅びてゆく様を描いている。

そしてこの連作の最終、第五部 'Desolation' は、まさに“強者どもの夢のあと”で、破壊されつくした大宮殿の残骸が散在し、人影はまったくない、荒涼たる風景の中に、自然は再びその姿をはっきりと現しはじめている。最後に勝利を納めるのは人間ではなく、自然であることを証明している。

ひとつの cycle が終わり、新たな cycle が始まろうとしている。この、“夢のあと”に再び自然が甦り、新しい人々の生活が始まっているという“再生”を暗示するテーマは Cole にとって未来への希望の象徴なのである。ヨーロッパ旅行の経験に基づいて、彼はいくつかの類似した作品を残している。そのひとつである 'A View Near Tivoli (Morning)' (1832) には、過去の文明の遺跡の中で、人生の無常を思わせる白日夢の中にいるような雰囲気がある。たとえ、人が築いた文明が完全に滅んでしまっても、自然は永遠に存在しつづける。Cole は日記の中に次のように記している。

“. . . man measures time by hours and minutes, but nature by the changes of the universe.”⁽¹⁰⁾

‘The Roman Campagna’ (1843) は ‘Tivoli’ と同じ古代ローマの水道橋の草むす遺跡が、始まりも終わりもなく、画面を越えて続いてゆく様を描き、その荒野に、過去の歴史をまったく気にもとめていない羊飼いを配している。過去は完全に死に絶えて、新しい現在が息づいている。それはまた、ひとつの文明が滅びても、必ず新しい生活が芽生えてくるという人間の力強さをも象徴している。

1842年に訪れたシシリー島の光景をもとに制作された ‘Mount Aetna From Taormina’ (1844) には、古代遺跡の後方に広がる現在の都市、美しい海岸線、なだらかな平野部とそれに続く山並み、そして巨大な活火山などが描かれているが、ここには、人間によって作られたものと、神によって創造されたものがはっきりと対照をなしている。

五連作 ‘The Course of Empire’ は、それぞれの state を通してアメリカの歴史に反映する要素をもっている。‘The Savage State’ は Europeans が New World へ移住してくる前の状態であり、‘The Pastoral State’ は Europeans が移住してきた当初であり、Native Americans を奥地へ追いやるようになる以前の時期といえよう。昔から住んでいた者も、新しくやってきた者も大自然もすべてが平穏に共存していた時代であり、‘The Consummation’ の状態は19世紀であり、産業革命の影響が New World へと押し寄せ、アメリカが工業力を中心に著しい発展を遂げた時代で、その発展のために開発が盛んに行なわれ、自然破壊を余儀なくされていった時期である。そのあとの ‘Destruction’ と ‘Desolation’ は、このような時が来ることのないように努力を続けなければならないという予言的性格を含んでいる。

Cole はこの作品の解説文に Byron の詩 ‘Childe Harold’s Pilgrimage’ (1812年) の Canto the Fourth CVIII. から次の部分を取り上げている。

First Freedom, and then Glory—when that fails,
Wealth—Vice—Corruption

この stanza は次のように始まっている。

There is the moral of all human tales ;
'Tis but the same rehearsal of the past⁽¹¹⁾

'Empire'の中で Cole は、アメリカをヨーロッパの古代帝国の姿に置き換えて、アメリカ社会への警鐘を表現している。新世界もいつかは人口過剰となり、開発が進み、自然が破壊される。人々は一時期はその有り余る豊かさに溺れるが、将来の危険性を無視すれば、その栄華に満ちた帝国もやがて滅びる時が来る。この過程を踏むのは“古代帝国”だけではない。人間はいつの世にもその過ちを繰り返すのではないか。自然資源の豊かさを無限に求めている時は、その資源を貪り尽くしたあとに何が来るのか、どのような状態がやってくるのかを考えようとしなない。たとえ、その危険性を警告する者がいたとしても、それに耳を傾ける者はほとんどいない。知らぬ間にその時はひたひたと確実に人々の背後に迫って来る。ようやく皆が気づく頃にはすべてを失った荒野と化しているのである。この危険性を、19世紀前半において Cole はすでに感じとっていたのである。Cole の研究者 Matthew Baigell は著書 Thomas Cole の中で次のように述べている。

The Course of Empire might have been painted in response to the American civilization of the 1830s as much as to the traditionally attributed Romantic interest in the cycles of nature, of governments, and of civilizations.⁽¹²⁾

III

Cole の考える自然とはどのようなものであったか。彼にとって自然は、神に近付くために通過しなければならない存在であり、自然は人間を神に導く案内者でもあった。Cole にとって神は、自然の中に宿るのではなく、自然をはるかに超越したところに存在する。1843年に書かれた詩 'Sunset' の中で Cole はその考えを暗示している。

Let us give thanks to God that in his love
He grants such glimpses of the world above
That we poor pilgrims on this darkling sphere
Beyond its shadows can our hopes uprear⁽¹³⁾

また、'Morning!' という詩の中では、さらに明白に神の存在するところについて、つぎのように表現している。

See how shines the morning light
Gently on each tree and flower
God hath kept them safe all night
By his goodness and his power

Like the Birds with cheerful voices
When the morning lights the sky
Our own simple songs should rise
Unto God who dwells on high⁽¹⁴⁾

自然が人間が神に近付くための案内者の役割をする存在ならば、その自然が破壊されてゆくということは人間にとって、神との距離がさらにひろがってゆくことになる。Cole の 'The Lament of the Forest' (1841) という

詩の一節に次のような箇所があるが、ここでは強い口調で、自然破壊を嘆いている。

Each hill and every valley is become
An Altar unto Mammon, and the gods
Of man's idolatry—the victims we.⁽¹⁵⁾

Cole は、アメリカの自然とその風景は、ヨーロッパとはまったく異なる、多くの固有な要素をもっていると思っていた。ヨーロッパには、その精神、思想とも深く関わる古代の遺跡があるが、アメリカにはない。しかし、そういう過去を引きずったものがないかわりに、アメリカには他に価値あるものがあるはずである。まず、人の足跡のない未開発の雄大な自然がある。それは、“神”に話しかけるにふさわしい場所である。次に、アメリカには美しく、崇高であり、壮大である場所がいたるところに見られることである。そして、アメリカは過去にこだわることなく、未来への関わりのみを考えてゆくことのできる国であった。このような考えに基づいて Cole は、静かな湖水、キャツキル山脈の美しい山並み、コネチカット川沿いの開拓者たちの生活風景、夕暮の空に浮かぶさまざまな雲の形や、刻々と移りゆく色彩の華麗さ、秋の紅葉の多彩な色合、種類に富む森林の樹木などを自らの足で訪れている。彼にとって原始に近い自然の姿を残しているアメリカで営まれる生活は素朴で平安なものであり、それは天地創造のはじまりの頃の様子を彷彿とさせるものであるべきであった。その状態が崩れゆくことを懸念した Cole は 'Essay on American Scenery' (1836) の中で次のように書いている。

We are still in Eden ; the wall that shuts us out of the garden is our own ignorance and folly.⁽¹⁶⁾

Cole は自然を人間にとって“神”へ近付くための案内者であるとして、自然に対して信仰に近い尊厳を感じていたが、Ralph Waldo Emerson (1803-1882) と比較すると、Cole の自然観はあっさりしている。Emerson には発展するアメリカを強調する新しい時代の思想家としての激しさがある

1836年に出版された随筆‘Nature’の序文で Emerson はこう書き出している。

Our age is retrospective. It builds the sepulchres of the fathers. It writes biographies, histories, and criticism. The foregoing generations behold God and nature face to face; we, through their eyes. Why should not we also enjoy an original relation to the universe? Why should not we have a poetry and philosophy of insight and not of tradition, and a religion by revelation to us, and not the history of theirs?⁽¹⁷⁾

古い因習に縛られることなく、独自の思想の趣くままに行動する勇気を、そして、そのことが正しい生き方または価値ある生き方であることを実証することが、教会を離れた Emerson の使命であった。そして彼はそのための力を得る場所は自然の中にあると考えた。勿論その自然とは、新大陸の新しい国、アメリカそのものであった。Emerson の自然観は次の言葉に要約されるだろう。

Standing on the bare ground,—my head bathed by the blithe air, and uplifted into infinite space, —all mean egotism vanishes. I become a transparent eyeball ; I am nothing; I see all ; the currents of the Universal Being circulate through me; I am part or parcel of God.⁽¹⁸⁾

Cole は自然について詩 'The Wild' の中で、次のように書いている。

Friends of my heart, lovers of nature's works,
 Let me transport you to those wild, blue mountains
 That rear their summits near the Hudson's waves.
 Though not the loftiest that begirt the land,
 They yet sublimely rise, and on their heights
 Your souls may have a sweet foretaste of heaven.
 And traverse wide the boundless. . . ⁽¹⁹⁾

Emerson は自然の美をわが手に握りしめたいと願ったが、Cole は自身を自然の中に委ねることに満足感をもっていた。そして、自分が神と一体となるのではなく、神は常に自然をさらに超えたところに存在すると考えていた。

Our own simple songs should rise
 Unto God who dwells on high ⁽²⁰⁾

Let us give thanks to God that in his love
 He grants such glimpses of the world above
 That we poor pilgrims on this darkling sphere ⁽²¹⁾

Cole は神の存在とある距離を保ち、神と人との間にある中間地帯が自然であると考えた。したがって、自然に相對することは、その向こうにある神に相對することにつながると考えた。しかし、Emerson のように 'I am nothing; I see all; . . . I am part or parcel of God.' とは考えなかった。自然の中に身を委ね、神の存在を感じ、信仰をたかめてゆこうと努力することが、Cole の理想とした宗教観であった。

Emerson の宗教観と Cole の信仰思想の相違について Baigel は次のよう

に述べている。

He (Emerson) believed that he could find God, or the Spirit of the Universe, by his own efforts. . . . he would locate that Spirit within himself ; that is, God existed in him rather than as a distinct entity on high. . . . By contrast, Cole was more passive and traditional in his relationship with the Deity, less aggressively individual. Nature was a manifestation of God but was not synonymous with him. Cole traveled through nature to divinity. For Emerson, nature and divinity were the same. . . .⁽²²⁾

Cole と Emerson の考え方の違いは、神と人はかけ離れており、神は超自然的存在であると考え、厳しい Puritanism (Cole) と、Puritanism の影響から脱け出して、神と人は一体になりうるという Transcendentalism (Emerson) の相違であった。

しかし、このように思想的には異なっても、ともに限りなく自然を愛したこの二人には必然的に多くの共通点がみられる。Emerson は 'Nature' の中で

We are as much strangers in nature as we are aliens from God. We do not understand the notes of birds. The fox and the deer run away from us ; the bear and tiger rend us.⁽²³⁾

と書いているが、Cole も Gilmor への手紙 (1826) の中で自然を描くときの心構えとして次のように書いている。

. . . the less he studies from Nature, the further he departs from it, and loses the beautiful impress of Nature which you speak of with such

justice and feeling.⁽²⁴⁾

Cole も Emerson も、根底においては、自然の中に入り、自然に深く接し、自然と関わりあいをもつことによって、人間はもっとも理想的な生き方を学びとることができ、何ものにもとらわれずに、自由になることができるし、それ故に神の存在をさらに身近に感じることが可能になると信じた。この点では“自然”について共通の認識があったと言えよう。

画家として 'God's first temples'²⁵である自然を描き続けることによって Cole は自分の信仰を深めていったが、その仕事は神への献上であり、自身の信仰の証でもあったはずである。

註

- (1) Baigell Matthew, *Thomas Cole*, Watson-Guption Publisher, NY, 1985, p.22.
- (2) Ibid.
- (3) McDowell Tremaine, ed., *William Cullen Bryant*, American Book Co., NY, 1935, p.78.
- (4) O'Neill John P., ed., *American Paradise, The World of the Hudson River School*, The Metropolitan Museum of Art, NY, 1987, p.30.
- (5) Ibid., p.29.
- (6) Ibid., p.31.
- (7) Baigell, p.50.
- (8) O'Neill, p.128.
- (9) Miller Angela, *The Empire of the Eye*, Cornell University Press, Ithaca, NY, 1993, p.23.
- (10) Baigell, p.46.
- (11) Coleridge Ernest H., Ed., *The Works of Lord Byron, Poetry Vol. II*, Octagon Books, NY, 1966, p.408.
- (12) Baigell, p.22.
- (13) Ibid., p.25.
- (14) Ibid., p.36.
- (15) Ibid., p.66.
- (16) Novak, Barbara, *Nineteenth-Century American Painting*, Artabras, NY, 1991,

- p.14.
- (17) Cook Reginald L., ed., *Ralph Waldo Emerson, Selected Prose and Poetry*. Holt, Rinehart and Winston, NY, 1966, p.3.
 - (18) Ibid., p.6.
 - (19) O'Neill, p.124.
 - (20) Baigell, p.36.
 - (21) Ibid., p.25.
 - (22) Ibid.
 - (23) Cook, p.39.
 - (24) O'Neill, p.25.
 - (25) McDowell, p.49.

写真：‘The Course of Empire’ by Thomas Cole (1836) Oil on canvas. The New-York Historical Society, New York 所蔵。
The Empire of the Eye より複写。

参考文献

- Baigell, Matthew, *Thomas Cole*. Watson-Guption Publisher. New York, 1985.
- Coleridge, Ernest H., ed., *The Works of Lord Byron*. Vol. II, originally published 1898-1904 by John Murray (Publishers) Ltd., Reprinted by Octagon Books, Inc. New York, 1966.
- Cook, Reginald L., ed., *Ralph Waldo Emerson, Selected Prose and Poetry*, Holt, Rinehart and Winston, New York, 1966.
- Gardner, Albert Ten Eyck, *American Paintings*, Vol. 1, *Painters born by 1815*, The Metropolitan Museum of Art, New York, 1965.
- McDowell, Tremaine, ed., *William Cullen Bryant*, American Book Co., New York, 1935.
- Miller, Angela, *The Empire of the Eye*, Cornell University Press, Ithaca, NY, 1993.
- Novak, Barbara, *Nineteenth-Century American Painting*, Artabras, New York, 1991.
- O'Neill, John P., ed., *American Paradise. The World of the Hudson River School*, The Metropolitan Museum of Art, New York, 1987.
- Emerson, Ralph Waldo. 酒本雅之訳『エマソン論文集』岩波書店1972.
- Scheller, William G., *The Hudson River Valley*, American Geographic Publishing, Helena, MT, 1988.